



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

TIEPh

Toyo University
125th
Anniversary



TOYO UNIVERSITY

Newsletter No.14 2012. 7

国際セミナー「環境の危機と人間の危機—自然と共生する社会とは—」

茨城大学：中川 光弘

東洋大学 TIEPh と茨城大学 ICAS は、2006 年に IR3S(サステナビリティ学研究連携機構)に参加したのを契機に、国際セミナーの共同開催を通じたエコ・フィロソフィの共同研究を続けて来た。この共同研究の成果は、2010 年にノンブル社から刊行された『サステナビリティとエコ・フィロソフィー—西洋と東洋の対話から—』にまとめられている。今回の国際セミナー「環境の危機と人間の危機—自然と共生する社会とは—」は、この共同研究の第2フェーズの立ち上げとして企画されたもので、第1フェーズでは思想研究が中心で社会科学的研究が不十分であったことの反省を踏まえて、自然と共生する社会の制度設計も視野に入れてスタートしたものである。

3月10日に開催された今回の国際セミナーでは、まず「文化と自然」と「社会と自然」の2つの分野について、7名の報告が行われた。竹村牧男(東洋大学学長)「自然共生社会の思想的基盤をさぐる—仏教の立場から—」、山村(関)陽子(東洋大学助手)「共生社会のダーウィニズム—『種の起源』における闘争(Struggle)概念の分析から—」、オブヒュルス鹿島ライノルト(上智大学教授)「エコロジー、持続可能性、共生—日本及びドイツにおける人間・自然関係の概念に関する覚書—」、中川光弘(茨城大学教授)「現代の人間危機と自然共生社会」、岡野守也(サングラハ教育・心理研究所主幹)「新しいコスモロジーと緑の福祉国家」、亀山純生(東京農工大学教授)「自然共生社会と風土—主体形成との関わりから—」、小川芳樹(東洋大学教授)「人間と環境・エネルギー—主体的に関わることの意義—」の7報告である。

これらの報告を踏まえてパネルディスカッションが行われた。ゲストコメンテーターの上柿崇英(鹿児島大学講師)、ジェフリー・クラーク(本郷高校講師)両氏の問題提起を受けて、「自然共生社会」実現のための人文科学と社会科学の統合の可能性を中心に討議が行われた。

自然共生社会は、環境としての自然との共生だけでなく、人間の自然性の十全な発現が保障された社会でなければならない。そのためには、自然や社会のメカニズムの解明とともに人間としての自己の究明を深める必要がある、との認識を共有することのできた国際セミナーであったと思う。共同研究第2フェーズでの、今後の展開が期待される。



東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ(TIEPh)は、自然観探究ユニット、価値観・行動ユニット、環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。

マレーシアの価値観調査と大学訪問

価値観・行動ユニット：大島 尚

第2ユニットの4人のメンバーで、今年の2月21日から25日まで、マレーシアを訪問しました。第一の目的は、第2ユニットがマレーシア全土を対象に行っていた環境問題に関する価値観調査について、サンプリングや訪問調査員の派遣などを委託していた現地の調査会社を訪問し、具体的な実施方法や進捗状況を担当者から直接報告してもらうことでした。会社は、クアラルンプール市郊外のペタリンジャヤ市内のオフィス街にあり、責任者と面会していろいろな話を聞くことができました。第2ユニットでは、これまでにアジア各国での大規模な調査を行ってきましたが、国によって事情が異なるため、実施にあたっては実際に訪問して状況を確認する必要があると考えています。今回のヒアリングで印象的だったことは、調査の質保証や会社の信用保証について詳しく説明してくれたこと、マレーシアではこのような研究目的の調査はあまり行われていないらしいこと、およびマレーシアの多民族性に関する話題でした。その後この会社からは、調査結果の分析に役立つ多くの資料をメールで送っていただくことができました。

マレーシア訪問の第二の目的は、大学間の研究交流を進めることでした。具体的には、国際イスラム大学（IIUM）とマラヤ大学（UM）を訪問し、教授たちと意見交換をしながら今後共同で研究を行えそうなテーマを検討しました。IIUMでは、まず心理学科のNoraini Noor教授を訪ね、他の教授たちも交えて心理学の教育や研究に関する幅広い情報交換を行いました。特に、イスラム文化のもとでの心理学教育に関するお話はとても興味深いものでした。次に、建築・環境設計学部長のKhairuddin Rashid教授を訪ね、同学部の学科長たちと今後の研究協力の可能性について、研究費の問題なども含めて具体的に話し合いました。またUMでは、教育心理・カウンセリング学科と文化人類学・社会学科の教授たちと面会し、連携できそうな研究テーマについて今後も情報交換を続けることを確認しました。

2月とはいえ、マレーシアの気候は日本では真夏ですので、行きと帰りに少し戸惑いましたが、現地にいる限りは快適で、とても有意義な訪問でした。



国際イスラム大学のキャンパス



道志村視察記

環境デザインユニット：稲垣 諭

TIEPhの第三ユニットは哲学的環境デザインの探求を柱に研究を進めているが、今回、SSCの会員でもあり、地域の自然を生かした村づくりを進めている山梨県道志村をモデルケースとして視察した。道志村は、神奈川県相模原市の北西に接する、東西に20キロほどに延び広がった山間の村である。村の営みの多くは、東西を貫いて流れる道志川の沿川で行われて

いる。西から東にかけて高低差もあることから、桜の開花やホタルの繁殖の前線が一月ほどの時間をかけて北東に駆け上がって来ため、観光の名物ともなっている。とはいえ、山梨県にとどまらず国内の村の多くは、市町村合併や吸収によって衰退の一途にあるのが現状であり、道志村もその例にもれず、人口減少、高齢化、過疎化という問題を抱えている。にもかかわらず、この村は、一部の山の土地を所有する横浜市とも連携し、道志川を横浜市の水源地としてクローズアップすることで、固有な自然環境価値を設定し、多くの村外者の獲得に成功している。

水源地をそれとして保護し続けるためには、山の整備、育林が必要となるが、現状では NPO やボランティアの人手を介して山林の間引きを行っている。間引かれた木材は、建材として使用されるもの以外は、温泉用のバイオマスボイラーに活用し、資源の活用の選択肢を可能な限り広げている。多くの山の所有者は、痩せた木の間伐をみずから行うことはない。そのため、村が設立し、委託する法人にそれら廃材をバイオマス燃料として買い取らせることで、より多くの自然環境改善の参加者を募ってもいる。また、高齢化や村外移住により耕作放棄地も増えてはいるが、村が委託する法人が「道の駅どうし」を運営し、農協やその他の企業を媒介せずに、農家と個別に取引をし、野菜や果物の販売を行うことで農業意欲の向上、雇用機会の提供も行っている。道の駅としては全国でも上位ランクに入るほどの知名度を獲得しているらしい。現状に鑑みれば、かなりの部分で成功を収めている村運営である。したがって重要となるのは、これまでの試みを持続させたまま、今後の村の展望、そしていまだ注目されていない自然の活用を見出すことで、村そのものの固有価値の創出ができるかどうかだと思われる。これら課題の設定、アイデアの創出は、そのまま第三ユニットの探究課題に直結している。



間伐された山林



村の歴史について役場に勤務する諏訪本さんに話を伺う

SSC 総会報告

TIEPh 代表：山田 利明

サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアムの24年度第1回理事会が、去る5月26日大阪大学会館（大阪大学豊中キャンパス）で開催された。議題は23年度の事業報告と決算報告、24年度の事業計画と予算案について、役員交代について、役員任期満了に伴う新役員の選出、新入会員の審査・承認、の5件であった。新役員については、前期と同様、理事長に小宮山宏氏を選出、理事18名も前期からひきつづき再任となった。会員状況は、教育・研究機関が13、自治体が4、企業が12、諸団体3、個人25となっている。

現在、TIEPhは教育委員会の正規メンバーではないが、将来的には大学院における科目の設置を目指しているため、オブザーバーとして委員会に参加している。今後も委員会に参加しながら、科目設置の方途を探る。

今回は、理事会・総会を挟み、25日には大阪大学CEIDSとの共催により、午前「震災復興への取り組みと、大学からの貢献」、午後「技術シーズと環境イノベーション」、「サステナビリティ教育と人材育成」の3セッションの研究集会が開かれ、活発な意見の交換が行われた。さらに、総会終了後、公開シンポジウム「持続可能社会のグランドデザインとイノベーション」があり、小宮山理事長の基調講演など、多彩な成果の報告が行われた。

TIEPh 事務局から

2011年度のTIEPhの運営・研究体制に関し、外部の評価委員3名による総合評価はA(優)2名、B(良)1名でした。比較的少ない研究費のなかでも新たな学術の創成できており、公開シンポジウム等の充実による社会と市民へのインパクトは高く評価できるとされた一方、もう少し一般的なメディアに露出し、社会と市民への対話の継続及び自然科学を主軸とする環境学の進展と協働した社会への発信活動を期待するとの課題も提示されました。これらの評価を真摯に受け止め、TIEPhでは今後も研究活動に取り組んでいきます。

2012 TIEPh 活動組織

(2012.7 現在)

Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit Project Representative	山田 利明	代表(センター長) 環境デザインユニット
Takashi OHSIMA	Professor, Values and Behavior Unit	大島 尚	価値観・行動ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本 英夫	環境デザインユニット
Makio TAKEMURA	Professor, Nature Unit	竹村 牧男	自然観探究ユニット
Kohei YOSHIDA	Professor, Nature Unit	吉田 公平	自然観探究ユニット
Ichiro YAMAGUCHI	Professor, Nature Unit	山口 一郎	自然観探究ユニット
Shin NAGAI	Professor, Nature Unit	永井 晋	自然観探究ユニット
Tahoko SAKAI	Associate Professor, Nature Unit	坂井 多穂子	自然観探究ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values and Behavior Unit	安藤 清志	価値観・行動ユニット
Kazuya HORIKE	Professor, Values and Behavior Unit	堀毛 一也	価値観・行動ユニット
Naoya SEKIYA	Associate Professor, Values and Behavior Unit	関谷 直也	価値観・行動ユニット
Yoshiaki IMAI	Research Fellow	今井 芳昭	客員研究員
Ayano TANAKA	Research Fellow	田中 綾乃	客員研究員
Rina YOKOUCHI	Research Fellow	横打 理奈	客員研究員
Ryo NISHIMURA	Research Fellow	西村 玲	客員研究員
Satoshi INAGAKI	Research Supporter	稲垣 諭	研究支援者
Hideto NOMURA	Research Supporter	野村 英登	研究支援者
Yoko SEKI (YAMAMURA)	Research Supporter	関(山村) 陽子	研究支援者
Nobutoshi OKUBO	Research Supporter	大久保 暢俊	研究支援者
Shinji MUTO	Project Research Assistant (PRA)	武藤 伸司	プロジェクトリサーチ アシスタント
Dai IWASAKI	Project Research Assistant (PRA)	岩崎 大	プロジェクトリサーチ アシスタント

ニューズレター14号 平成24年7月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所: 東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel&Fax: 03-3945-7534

E-mail: ml.tieph-office@toyo.jp Website: <http://tieph.toyo.ac.jp>